

巻頭言

国際教養学部長 郡 伸哉

2008年度に教養部を改組して出発した国際教養学部は、2011年度に完成年度を終えました。この4年間、国際教養学部は、中京大学全体の共通教育を担うこと、そして国際教養学部の専門教育の体制を確立することという二つの課題に取り組んできました。そして4年目にあたる昨年度には、現今の情勢に対応すべく、全学共通科目、学部固有科目の両方においてカリキュラムの改正を行い、今年度からはその改正カリキュラムが実施されます。この「教養教育研究22」には、こうした国際教養学部の昨年度1年間の多面的な活動の経緯と成果が示されています。

本書の第Ⅰ部は、教育事業推進委員会が中心となって開催した学生向け講演会と経験交流会の記録です。5月に開催された学生向け講演会では、ピーター・バラカン氏に「異文化共存術」というタイトルで講演をしていただきました。異文化とのつきあい方に関する、体験に裏打ちされた独自の視点から大きな刺激を受けました。11月に開催された経験交流会では、演習科目の指導法という、大学教育のひとつの核となる事柄について、他学部の先生方を含め、経験と知見に富むパネリストの方々による報告が行われ、活発な討論が行われました。とくに今回の中心的な話題が卒業論文の指導であったことは、昨年度はじめて卒業研究指導に携わった教員、またこれから携わることになる教員にとって大いに参考となるものだったと確信します。

国際教養学部は、他の学部と比べて多くの成員を擁し、学部内の委員会活動も活発です。その中心をなすいくつかの委員会は、毎年3月に開かれる拡大将来計画委員会において1年間の活動を総括しています。本書の第Ⅱ部はそれらの活動報告です。本書がそれら個々の委員会の今後の活動だけでなく、委員会のあいだの連携の強化にも資することを願っています。

また、今年度から自己点検・評価報告書の作成に向けた作業が本格化します。日本の大学をめぐる情勢に大きな変化が萌すなか、中京大学国際教養学部という世界の一角において、わたしたちがどんな活動をしてきたのか、これから何をすることができるのかを考えることが必要となります。そうしたことを考えるための材料としても本書が役立つことを願っています。